

能登半島の交通結節点としての羽咋市の観光動向調査および 滞在型観光への戦略プランの研究

指導教員：金沢大学人間社会研究域人間科学系 准教授 眞鍋知子

参加学生：玄覚奈々子，白木里依，藤崎慎治，増田健太，村井千春，河上紘栄，齋木章太，
住吉愛里，松本典子，本山祐樹

1. 調査研究成果要約

①羽咋市の観光地への視察および地元の観光関連団体との意見交換を行った。②そこで出された意見をもとに観光客に対するアンケート調査項目を設定し、実際に観光客に調査を実施した。③アンケート調査を通じてわかった問題点を解決するための方法として、観光情報の発信にしばって検討した。④これらの結果から、羽咋市の情報を集約し、観光地をネットワーク化する結節点としての「道の駅」の設置を羽咋市に提言した。

2. 調査研究の目的

2014 年度開業予定の北陸新幹線の開通や、能登有料道路の無料化、東海北陸自動車道や能越自動車道の開通という交通網整備により、今後能登半島方面への交流人口が大幅に増加することが見込まれ、交通結節点に位置する羽咋市においては、その交通環境は大きな変化を迎えることが予想される。

羽咋市では、現在年間 200 万人以上の観光客のうち宿泊客は 10 万人程度であり、「通過型観光地」であることが積年の課題となっている。羽咋市には観光資源が豊富にあるにもかかわらず、有効に利用されていない現状なのである。

そこで私たちのゼミでは、観光客へのアンケート調査や観光関連団体からの聞き取りなどの観光動向実態調査を通して現状を把握することで、今後の各種施策に反映できる羽咋市の観光振興基礎データを作成することを研究の目的としている。

3. 調査研究の内容

《調査研究の骨子》

地元の観光関連団体との意見交換で得られた要望や観光客へのアンケート票を用いた面接調査から得られたデータを集計、分析した。その結果、羽咋市では観光地のネットワーク化や観光情報の発信が上手くなされていないことが明らかとなった。そこで、観光関連団体への中間報告会にてこの結果を報告するとともに、その解決策として、観光に関する情報発信の結節点となる「道の駅」の設置について検討を行うこととした。羽咋市での最終報告会において、全国の「道の駅」の状況について、特色のある道の駅、道の駅のキャッチフレーズ、立地条件の 3 点について報告し、羽咋市内に魅力ある「道の駅」を設置することを提言した。

《調査スケジュール》

6月25日, 7月6日	羽咋市内観光地視察
7月12日	羽咋市にて観光関連団体との意見交換会
7月31日, 8月1日	羽咋市にて観光客に対して動向調査実施
8～10月	観光客調査の分析
10月22日	羽咋市にて中間報告会
11月～	宿泊者調査の実施, 分析 および 観光情報発信方法の調査 →観光情報発信拠点としての「道の駅」に関する調査, 分析
2月8日	羽咋市にて最終報告会

《調査方法》

—アンケート票を用いた観光客面接調査—

調査対象者 羽咋市内の各施設を訪れていた観光客（羽咋市民を除く）

調査対象数（回収数） 288人

調査方法 アンケート調査（他記式）

調査場所 千里浜海岸, 気多大社, コスモアイル羽咋, 妙成寺, 神子の里ほか

—宿泊者調査（宿泊施設配票留置）—

調査対象者 羽咋市内の宿泊施設に宿泊した観光客（羽咋市民を除く）

調査対象数（回収数） 74人

調査方法 アンケート調査（自記式）

調査場所 羽咋市内の宿泊施設7か所

4. 調査研究の成果

1) 羽咋市内観光地視察

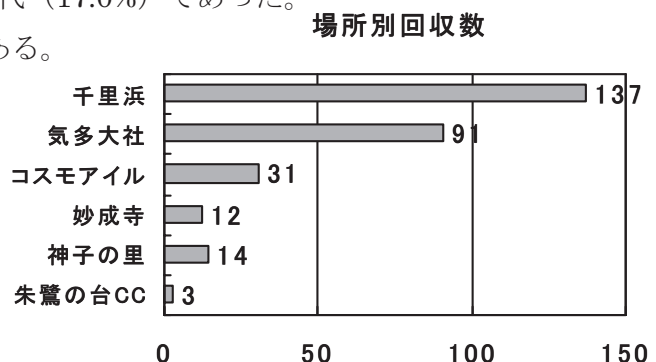
観光ボランティアや市職員の案内で市内観光地を視察した。これによりおおまかに羽咋市の現状や課題を把握することができ、調査項目を設定する上で役立てることができた。

2) アンケート票を用いた観光客面接調査

回収数は288人で男性53.8%, 女性45.8%(無回答0.4%)で、年齢は30代の回答者が33.7%と最も多く、次いで20代(21.5%), 40代(17.0%)であった。

場所別回答者数の内訳は表1のとおりである。

調査を行ったのが夏であったため、千里浜海岸での海水浴客の回収率が高く、また、気多大社の「ついたち結び」参加客の回収率が高くなっている。回答者の住まいは北陸地方が約50%であり、



石川県からの観光客が 21.9%で最も多かった。

近隣からの観光客が多く、これまで複数回訪れているというリピーター率の高さを今後どのように活かしていくかが課題である。

旅行の動機・目的について訊ねたところ、前回イメージの良さと回答する人のほか、口コミでの評判を聞いて訪れる人が多いことがわかった。これは今後の情報発信においてもおいに活用すべき点だと考えられる。

また、交通手段について訊ねたところ、公共交通機関の利用率は極めて低く、自家用車の利用がほとんどであった。このことは、市内での細かい移動ができる観光客が多いことを示しており、案内板やマップなどの案内ツールの充実により、観光客に多くの観光施設に触れてもらう機会を増やすことに繋がるかもしれない。

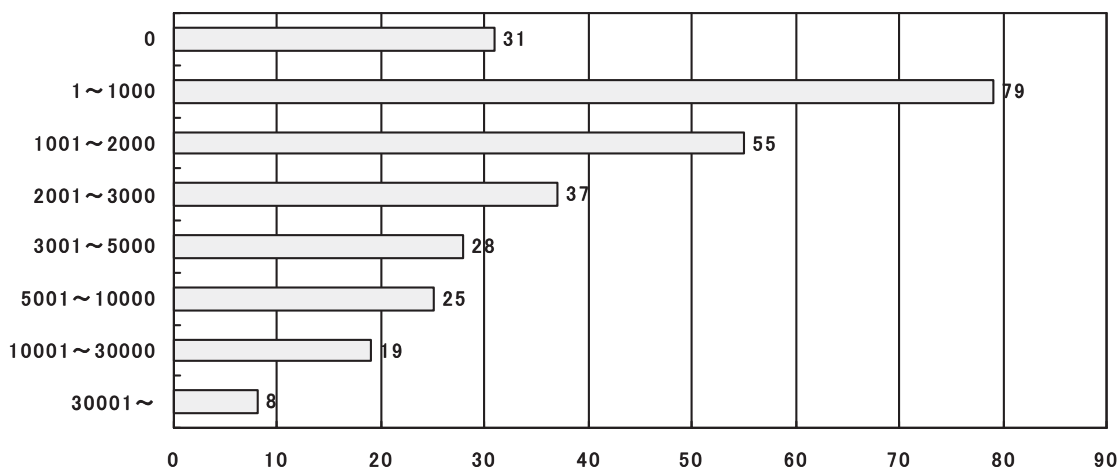
また、羽咋市内で使う予算について訊ねたところ、2,000 円以内と回答した人が全体の約 50%で、全く使わないと回答した人が全体の約 10%であった。この結果は、日帰りや目的の観光地に行く途中で訪れたという人が多かったことが原因であると考えられる（図1）。

今回の調査において得られた結果は羽咋市で行われた中間報告会にて発表した。報告会では市民との意見交換も行われ、その後の調査の方向性を決めることができた。



写真1:千里浜海岸での面接調査の様子

図1:予算



3) 宿泊者調査の分析

面接でのアンケート調査に引き続き、11 月には羽咋市内の各宿泊施設に宿泊者向けのアンケート票を設置した。回収数は 74 人で男性 73.0%, 女性 25.7%(無回答 1.4%)で、年齢は 60 代の回答者が 29.7%と最も多く、次いで 30 代 (17.6%), 50 代 (14.9%) であった。前

回の調査に比べると2回以上訪問しているリピーターと初めて訪問した人の割合は、ほぼ半々であった。また、近隣以外の様々な地域からも訪れている人が多く、10人を超える団体で宿泊している人も2割程度いることが特徴であった。

羽咋市内で訪問経験のある、またはこれから訪れる予定の観光施設を訊ねたところ、千里浜なぎさドライブウェイが54.1%と圧倒的に多かった。次いで気多大社、妙成寺、ユーフォリア千里浜、コスモアイル羽咋と続くが、その他の観光施設については、1桁台と著しく低くなっている（図2）。回答数の少なかった施設の知名度を上げることはもちろん大切ではあるが、羽咋市以外の能登地域で魅力的だと思う観光地を訊ねた回答結果を見ると、千枚田や禄剛崎のような景観地や総持寺などの文化財よりも、和倉温泉や輪島朝市が人気となっており、温泉やグルメスポットが少ないことも羽咋市の弱点となっているのではないと思われる（図3）。

羽咋市を訪れようと思った動機を訊ねたところ、仕事や前回訪れたイメージ、インターネットからという回答がほとんどであった。前回訪れたイメージが良かったと答えた人は市内宿泊数が4回目以上の人が多いことから、リピーターを増やすことが安定した観光客、宿泊客数を維持することに繋がると思われる。

また、旅行の目的を訊ねたところ、最も多かった回答から順に、温泉、グルメ、自然風景、保養・休養という結果となった。その他にはドライブという回答も多数あり、千里浜なぎさドライブウェイの知名度の高さが浮き彫りとなった。

今回の宿泊者調査では、夏に行われた面接での調査とは違なり、宿泊者のみに聞いたことでより深く現実的な意見を抽出することができた。調査結果が今後の羽咋の観光振興に役立つことに期待したい。

図2: 訪問観光施設

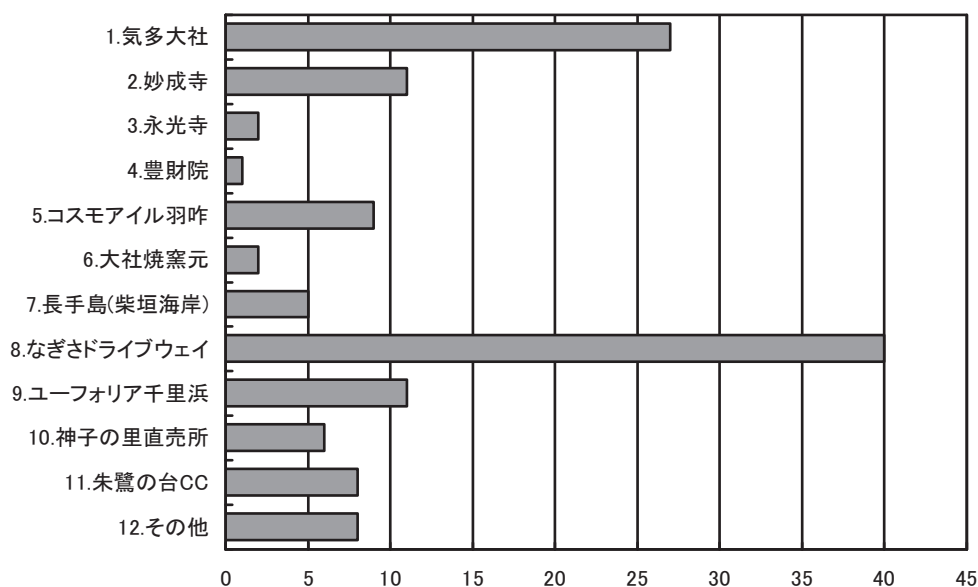
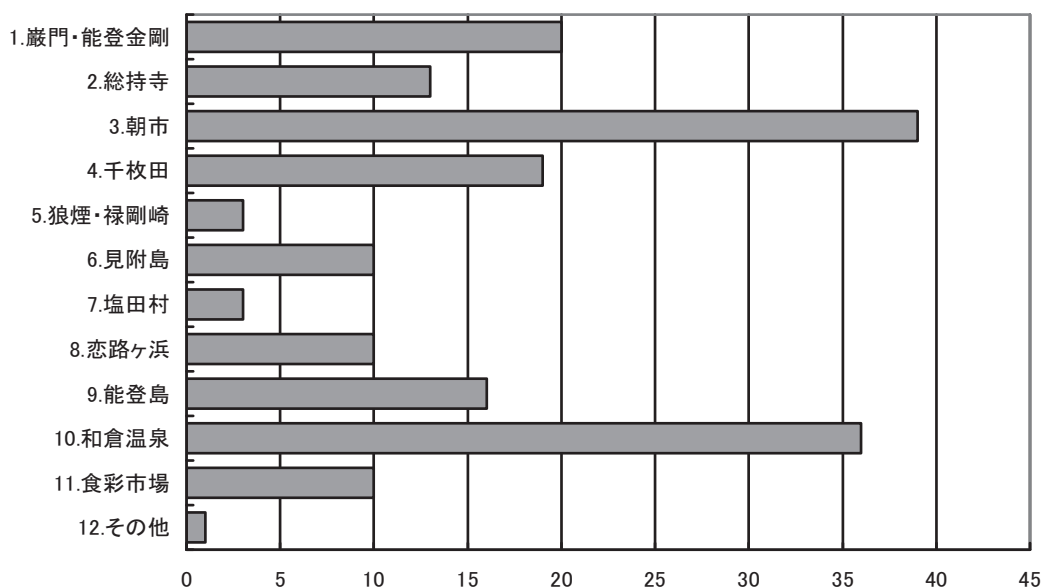


図3: 能登半島で魅力的な観光地



4) 観光情報発信の見直し

羽咋市が運営するホームページや市内施設の各ホームページ、市が発行している観光情報誌などを参照し、現状を把握するとともに改善点を明確にした。ホームページでは更新が滞っているものが多く、全体的に情報量がやや少ない、または情報が重複しているなどの問題点があり、観光客に対する情報発信が不十分であると考えられる。今後は情報発信の改善点をさらに検討していくとともに、情報の集約点として「道の駅」の設置についても提案していく。

5) グルメ開発

観光客の誘致にはグルメ分野の展開が効率的であると考え、昨今のご当地グルメ・B級グルメブームを研究し、羽咋市において活用できそうな例などを考察した。そして実際に羽咋市を訪れ、朝市や婦人会で高齢者の話を聞いたり、スーパーにて惣菜の調査を行なったが、羽咋市の郷土料理には、B級グルメに展開可能であろう要素は見つけられなかった。今後は、神子原米・カキ等の既存の特産物を核とした、観光客向けのグルメ開発に期待したい。

6) 道の駅設置の検討および観光情報の提供

観光情報の発信拠点として羽咋市で以前から検討事項とされていた「道の駅」の設置について、立地条件や他の地方自治体の取り組み、道の駅設置の成功例などの情報収集を中心に検討した。立地条件が客の入り込み数に与える影響は大きく、配置計画の策定において重要視すべき項目である。羽咋市独自の魅力ある「道の駅」の設置に向けてこれらのデ

一タ分析結果を役立ててもらいたい。

5. 調査研究に基づく提言

羽咋市を訪れる観光客への動向調査から、羽咋市は懸念されていた通り通過型の観光地になっており、羽咋市の観光が1日で済んでしまうほどにしか認知されていないことや、和倉温泉などの魅力的な他市の宿泊地が観光の目的となっているという問題が浮き彫りとなった。また、羽咋市では観光地ごとに独自に情報発信を行っていることが多く、相互連携が取れていないために情報が点となってしまっているということも分かった。それらを解決するためには、観光地および観光情報のネットワーク化を行い、情報発信の拠点となる「道の駅」が必要であると思われる。

そこで、全国の道の駅について特色のある道の駅、道の駅のキャッチフレーズ、立地条件という3つの方向から調査分析を行った。まず、特色のある道の駅としては、ご当地ソフトクリームやご当地グルメを目玉商品としたところや、地元で採れた季節の野菜を販売しているところなどがあった。また、流行りのゆるキャラのオリジナルグッズを販売しているところや、積雪地帯では雪を利用したかまくら作りや雪像イベントを行っているところもあった。

キャッチフレーズとしては、海や山といった自然に関する語句を取り入れているところや、その土地にゆかりのある人物の名前や観光地名を使っているところが多かった一方で、方言を用いたキャッチフレーズが思ったよりも少ないことが分かった。

さらに、立地条件としては、一日につき 5,000 台以上の交通量がある道路に面した場所が適しており、都会と比べて地価が安く豊富な土地を確保できる地方では、市街地に近い場所に道の駅を建設することが有効であると考えられる。

以上のことから、羽咋市の「道の駅」には、方言を使ったキャッチフレーズを用いることで独自性を出せるのではないかと、また地価が安いことを利用した交通量の多い中心地に「道の駅」を設置するのがよいのではないかと、という点を提言したい。

6. 調査研究の自己評価

今まで羽咋市の観光に特化した調査が行われていなかったため既存データがほとんどなく、観光についての問題点や改善点が曖昧になっていた。本調査によって羽咋市の観光客の動向に関する基礎データを作成でき、現状の把握に役立てることができた。しかし、回収したデータが海水浴客や気多大社参拝客が多かったことで、データに偏りが出てしまったことは反省すべき点である。

今後の課題として、羽咋市の情報発信方法の改善や情報発信の拠点となるような「道の駅」の早期設置の必要性などが明らかになった。本調査研究の結果を反映した地域活性化のための拠点づくりや情報発信の取り組みが実際に行われていくことを期待したい。